

菖蒲浴衣

長唄 全詞章

作詞者不詳 二世杵屋勝三郎 作曲 安政六年（一八五九）初演

〔本調子〕 五月雨や傘につけたる小人形 晋子^{しんし}が吟^{ぎん}もまのあたり 己^かが換名^{かえな}を市中^{いちなか}は
四方の諸君へ売り弘む 拙き業を身に重き

飾り兜の面影うつす皐月^{さつき}の鏡曇りなきの柳^{なぎ}の二葉の床^{ゆか}しきは 今日^{けふ}の晴着に風薫る
菖蒲浴衣の白襲^{がさ}ね表は縹^{はなだむらさき}紫に 裏むらさきの朱奪ふ 紅もまた重ぬるとかや
それは端午の辻が花 五とこ紋のかげひなた

〔二上り〕 暑さにつくる雲の峯 散らして果は筑波根の
遠山夕ぐれ茂り枝を 脱いで着替の染浴衣 古代模様のよしながき 御所染^{ごしよぞめせん}千弥忍^{せんや}ぶ摺り
小太夫^{こだいふ}鹿の子友禅の おぼろに船の

〔三下り〕 青簾^{あおすだれ}川風肌にしみじみと 汗に濡れたる枕紙^{まくらがみ}

鬢のほつれを簪^{かんざし}の 屈かぬ愚痴も好いた同士 命と腕を堀切の 水に色ある花あやめ
弾く三味線の糸柳 縫^{もつ}れを結ぶ盃の 行末広の菖蒲酒 これ百薬の長なれや

めぐる盃数々も 酌めや酌め酌め尽きしなき 酒の泉の芳村と 栄ふる家こそ目出度けれ